

西部第一落合遺跡群（2）

前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 2 1

前橋市教育委員会

西部第一落合遺跡群（2）

前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 2 1

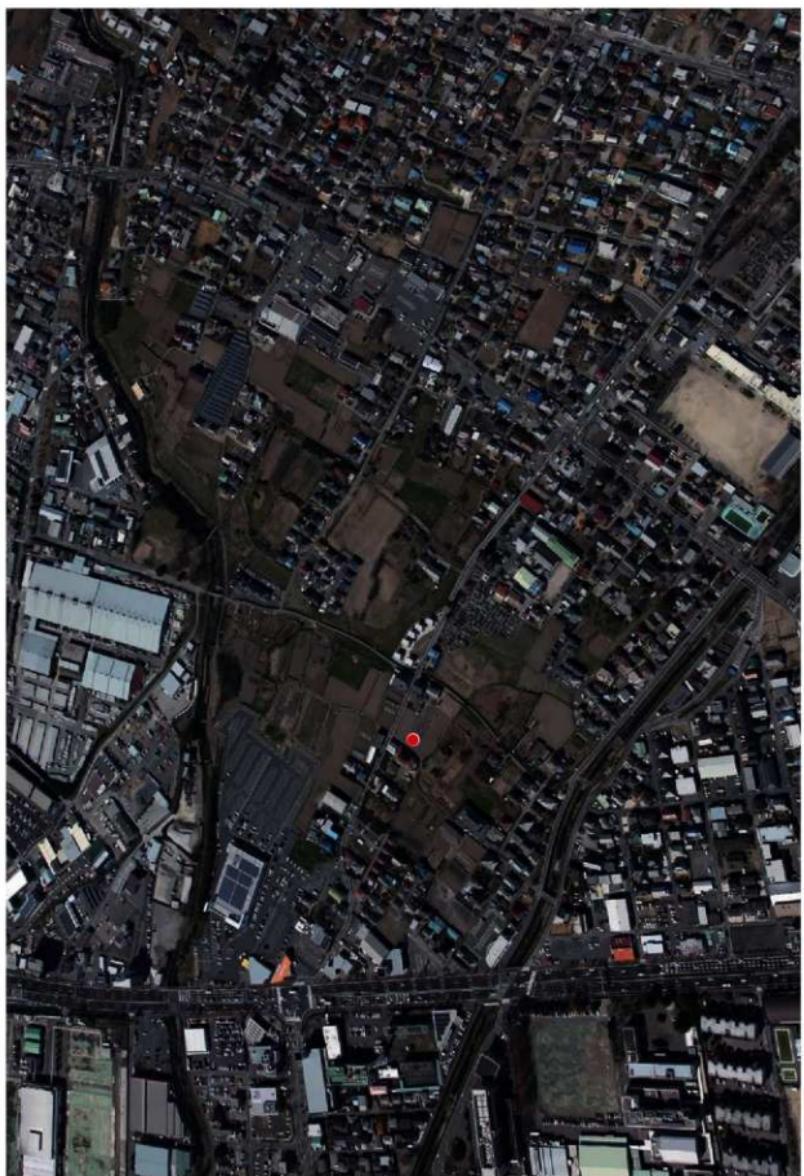
前橋市教育委員会



調査区全景（南から）



調査区全景（北から）



西部第一落合地区全景（上が北、赤点が本道路）

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中核として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国府、國分僧寺、國分尼寺など上野国の中核をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東七名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する西部第一落合遺跡群（2）は古代上野国の中核地域の調査であり、上野国府推定地域にも近接することから、調査成果に多くの注目を集めています。今回の調査では、国府そのものに関連する遺構の確認はかないませんでしたが、7世紀から11世紀代の集落跡が見つかりました。こうした調査成果の積み上げが国府や国府のまちの姿の再現に繋がると考えております。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和3年9月

前橋市教育委員会
教育長 吉川 真由美

例　　言

1 本報告書は前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴う「西部第一落合遺跡群（2）」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 発掘調査および整理作業の体制は以下の通りである。

遺跡名	西部第一落合遺跡群（2）（包蔵地名 前橋市0134遺跡）
遺跡コード	3 A 267
遺跡所在地	群馬県前橋市元総社町749
監理指導	寺内勝彦（前橋市教育委員会）
発掘調査・整理作業担当	佐野良平（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	令和3年7月5日～令和3年7月28日
整理・報告書作成期間	令和3年8月1日～令和3年9月30日
発掘調査・整理作業参加者	
畔見恒夫 新井 實 岡部四郎 桑原 清 木暮知二 杉田友香 高見壽美子 萩原正夫 星野一江 細野竹美 山口直子	
3 本書の編集は佐野が行い、原稿執筆についてはIを寺内、他を佐野が担当した。	
4 本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会で保管されている。	
5 下記の諸氏・諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。	
山下工業株式会社	

凡　　例

1 掘団中に使用した北は座標北であり、座標については日本測地系に基づく平面直角座標第IX系を使用した。

2 掘団に国土地理院発行1/25,000「前橋」、前橋市発行1/2,500都市計画図を使用した。

3 遺構名称は、堅穴建物跡：H、井戸：I、土坑：D、ピット：Pである。

4 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。

　遺構 堅穴建物跡・・・1/30、1/60　　井戸、畠跡、土坑、ピット・・・1/60　　全体図・・・1/100
　遺物 土器・・・1/3、1/4

5 本文および表中の計測値については（ ）は現存値を、〔 〕は復元値を表す。

6 遺構・遺物実測図のトーン表現は以下の通りである。

　遺構・・・硬化面：　火床面：
　遺物・・・須恵器：　縄釉陶器：

7 主な火山降下物等の略称と年代は次の通りである。

As-B（浅間B軽石：1108）

Hr-FA（榛名山ニッカ岳洪川テフラ：6世紀初頭）

As-C（浅間C軽石：3世紀後半～4世紀中葉）

目 次

巻頭図版

はじめに

例言・凡例

遺跡の位置

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	1
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
III 調査方針と経過	7
IV 基本土層	7
V 遺構と遺物	9
1 堅穴建物跡	
2 井戸、畠跡、土坑、ピット	
VI まとめ	16

挿図目次

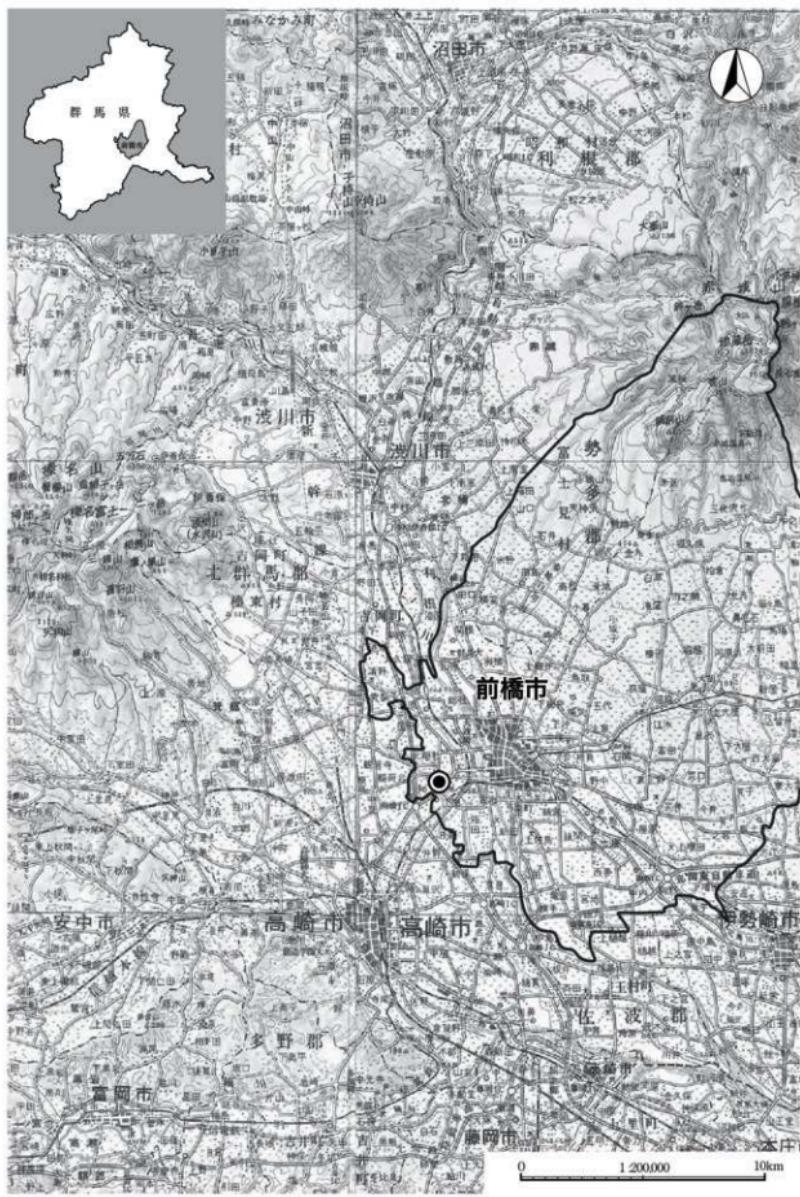
Fig. 1 調査区位置図	1
Fig. 2 周辺遺跡図	3
Fig. 3 グリッド設定図	5
Fig. 4 基本土層	7
Fig. 5 調査区全体図	8
Fig. 6 H-1・2・9号堅穴建物跡、畠跡	11
Fig. 7 H-3～8号堅穴建物跡	12
Fig. 8 H-6号堅穴建物跡カマド、井戸、土坑	13
Fig. 9 出土遺物（1）	13
Fig. 10 出土遺物（2）	14
Fig. 11 西部第一落合遺跡群（1）・（2）周辺の景観想定図	17

表目次

Tab. 1 周辺遺跡一覧表	4
Tab. 2 西部第一落合遺跡群周辺遺跡一覧表	6
Tab. 3 井戸・土坑・ピット計測表	10
Tab. 4 出土遺物観察表	15

写真図版

PL. 1 調査区全景、H-1全景、H-2全景、H-3全景、H-3火床面全景、H-4全景	
PL. 2 H-3・5・7・8全景、H-6全景、H-6カマド全景、H-9全景、H-9カマド全景 H-9石出土状況、I-1全景、I-2全景	
PL. 3 畠跡全景、D-1全景、D-2全景、D-1・3・4全景、D-5全景、P-1・2全景 P-3全景、P-4～6全景	
PL. 4 P-7全景、P-8全景、P-9全景、調査区北側基本土層、調査区南側全景、 調査区北側全景、調査風景	
PL. 5 出土遺物	



遺跡の位置

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市長 山本 龍（区画整理課）（以下「前橋市」という。）が施工する前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴い実施され、3年目にあたる。本事業地周辺は、上野国府推定域が近接すること、北側では元総社蒼海土地区画整理事業施行に伴い、20年以上に亘り発掘調査が実施され、数多くの貴重な調査成果を得ていることなどから、濃密な遺跡地として認識されている。

前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）は、令和3年4月16日付けで前橋市より依頼を受け、同年5月19日に市教委による試掘・確認調査を実施した。調査の結果、古代遺物包含層などが検出されたため、埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意した。

令和3年5月26日付けで前橋市より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼書が市教委に提出された。市教委では既に他の発掘調査予定があるため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで前橋市と合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。令和3年6月25日付けで前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結されるとともに、両者に市教委を加えた三者で協定を締結し、発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「西部第一落合遺跡群（2）」（遺跡コード：3A267）の「西部第一落合」は土地区画整理事業名を採用し、「（2）」は当該土地区画整理事業において2番目に実施した発掘調査として付したものである。

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

本遺跡が所在する前橋市元総社町は前橋市街地中心から南西約4kmに位置する。市街地西端にある場所で周辺には現在も畑地が多く見られる場所である。遺跡南東約200mには国道17号線高崎前橋バイパス、北側約200mには県道10号線前橋安中富岡線、西側約1kmには関越自動車道が南北に走っている。遺跡の東西には相馬ヶ原扇状地を源とする牛池川と染谷川が流れ、両河川の挟まれた地域に立地する。落合地区は榛名山南東に広がる相馬ヶ原扇状地から前橋台地といった平野部へと移行する地帯である。

本遺跡は令和元年度に調査された西部第一落合遺跡群（1）の西側隣接地にあたる。



Fig. 1 調査区位置図

2 歴史的環境

前橋市の南西部に立地する本遺跡周辺地域は、上野国府推定地や上野国分寺・国分尼寺を中心に連綿と遺跡が広がる地域である。関越自動車道建設や元総社蒼海土地区画整理事業などに伴う発掘調査が行われ、多くの遺構・遺物が確認されている。本遺跡周辺地域での時代毎の遺跡の概要は以下の通りである。

(1) 縄文時代 八幡川右岸の微高地上に産業道路東〔19〕・産業道路西〔20〕、染谷川左岸自然堤防上に上野国分僧寺・尼寺中間地域〔27〕・元総社小見Ⅲ遺跡〔13〕・元総社蒼海遺跡群〔24〕〔13〕、牛池川左岸自然堤防上に元総社蒼海遺跡群〔7〕・〔9・10〕〔13〕などが挙げられ、各遺跡で竪穴住居跡が確認されている。

(2) 弥生時代 当該期の遺跡は日高遺跡〔50〕〔51〕・上野国分僧寺尼寺中間地域・正觀寺遺跡〔49〕などがあるが、その分布は散在的である。この内、日高遺跡では As-C 下の水田跡が確認されており、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて継続して営まれた水田と捉えられている。元総社寺田遺跡Ⅲ〔44〕では牛池川自然堤防上で後期の住居群が確認されている。

(3) 古墳時代 利根川右岸の地域は県内でも有数の古墳密集地域であり、代表するものとして総社古墳群が挙げられる。古墳時代後期・終末期に亘り、王山古墳〔7〕・愛宕山古墳〔8〕・宝塔山古墳〔10〕・蛇穴山古墳〔11〕などの首長墓が多数築造された。また、この時期には山王庵寺〔4〕が建立され、総社古墳群を含め、政治的中枢地域となる。

山王庵寺は昭和 3 年に日枝神社境内が「山王塔址」として国指定史跡となり、その後昭和 49 ~ 56 年にかけて 7 次にわたる本格的な発掘調査が行われた。この調査で金堂の検出および「放光寺」範囲の平瓦出土により山王庵寺が「山ノ上碑」「上野国交替実録帳」にみられる「放光寺」であることが有力視されるようになった。平成 9 ~ 11 年の調査でも土坑から大量の塑像が出土し、平成 18・19 年度調査では北・東・西面、平成 20 年度調査では南面の回廊を検出している。さらに平成 21 年度調査では「推定中門」と「西側南側回廊」の周辺部が、平成 22 年度調査では北西隅の回廊と接するように「基壇建物跡」と「北方建物群」が確認されている。なお、この寺の塔心礎や石製鷲尾、根巻石等の石造物群は宝塔山古墳の石棺や蛇穴山古墳の石室と同系統の石造技術によるものと考えられており、仏教文化と古墳文化とが併存しながら機能していた様子が窺える。この時代の集落は牛池川・染谷川沿いの自然堤防上に展開しているが、前期～中期の集落は散見される程度で、後期からの集落増加が看取できる。生産域としては、牛池川左岸一帯に広がる低地平野において、総社閑泉明神北 IV・V 遺跡〔13〕・元総社北川遺跡〔25〕・元総社寺田遺跡Ⅲ・元総社明神遺跡〔43〕などで水田跡が、西部第一落合遺跡群〔1〕〔60〕では畠跡が確認されている。

(4) 奈良・平安時代 奈良時代には上野国府が造営され、上野国分寺〔2〕・国分尼寺〔3〕の建立に示されるように、本遺跡周辺は古代の政治・経済・文化の中心地として再編成される。

上野国府は元総社地域の区域に約 900m 四方に推定されている。関連遺跡として元総社小学校校庭遺跡〔46〕では県下最大級の掘立柱建物跡が、元総社蒼海遺跡群〔99〕・〔127〕・〔136〕〔13〕・上野国府等範囲内容確認調査 28・33・34 トレンチでは掘込地業を持つ建物跡が検出されている。元総社蒼海遺跡群〔9〕・〔10〕・〔95〕〔13〕では方形の柱穴掘り方をもつ大型掘立柱建物跡が確認されている。牛池川沿いの元総社明神遺跡Ⅲと元総社寺田遺跡Ⅲでは人形が、元総社寺田遺跡では「國府」・「曹司」・「國」・「邑厨」などの国府関連施設名が書かれた墨書き土器が出土している。元総社明神遺跡では南北方向の溝跡、閑泉橋遺跡〔36〕や元総社蒼海遺跡群〔7〕・〔9〕・〔10〕〔13〕では東西方向の溝跡が確認され、国府城の外郭線の想定が為されている。また、周辺遺跡からは円面鏡や綠釉陶器、巡方（腰帶具）なども出土しており、国府を考える上で貴重な資料となっている。

国分僧寺は大正 15 年に国指定史跡となり、昭和 40 年代から部分的な発掘調査が進められるようになった。昭和 55 年以降には本格的な調査が始まり、主要伽藍の礎石・塼垣・堀等が確認されている。また、平成 24 年

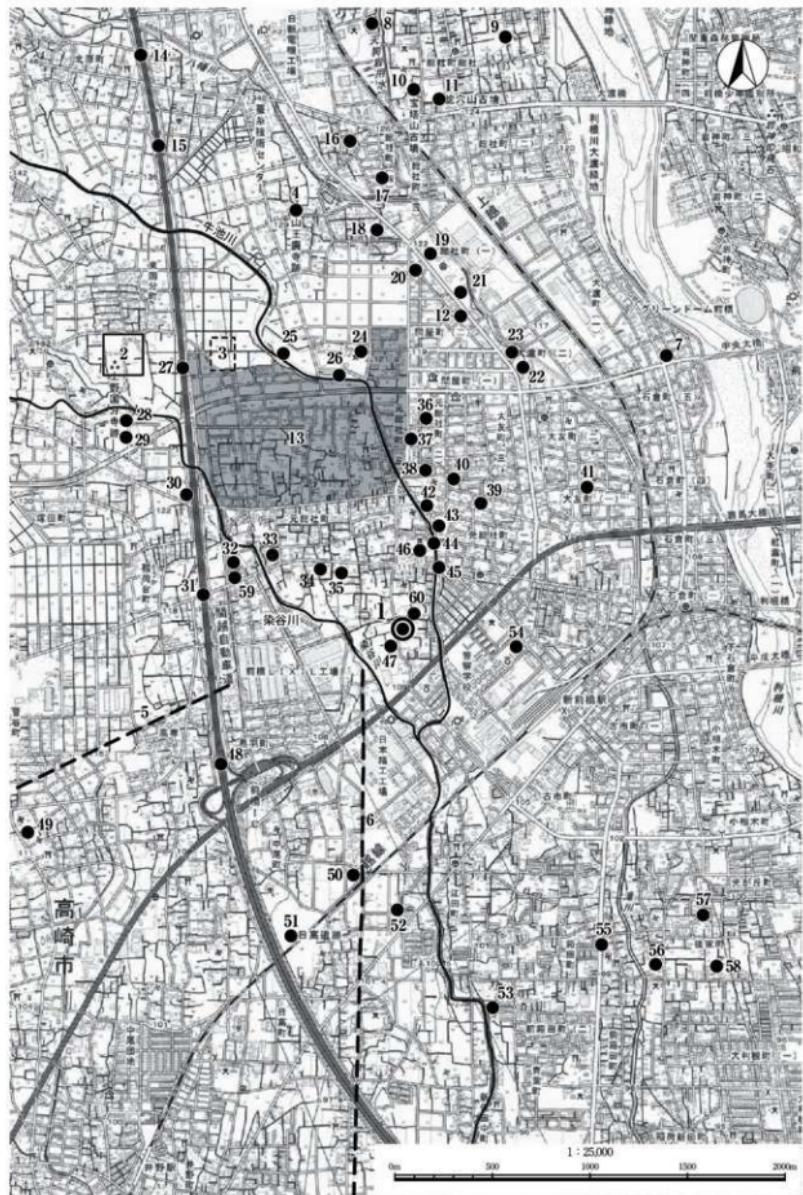


Fig. 2 周辺遺跡図

Tab. 1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	西部第一落合遺跡群（2）	17	大船橋遺跡Ⅰ～Ⅴ	39	堀越遺跡
2	上野国分寺跡	18	昌楽寺跡向遺跡・Ⅱ遺跡	40	堀越Ⅲ遺跡
3	上野国分尼寺跡	19	產業道路東遺跡	41	大友宅地添遺跡
4	山王庵寺跡	20	產業道路西遺跡	42	大友屋敷Ⅱ・Ⅲ遺跡
5	推定東山道国府ルート	21	稻荷坂東遺跡	43	元能社明神遺跡Ⅰ～Ⅳ
6	推定日高道	22	大渡通路遺跡	44	元能社寺田遺跡Ⅰ～Ⅲ
7	王古墳	23	大渡通路Ⅱ遺跡	45	寺田遺跡
8	愛宕山古墳	24	元能社中学校遺跡	46	元能社小学校校庭遺跡
9	達見山古墳	25	元能社西川遺跡	47	元能社落合遺跡
10	宝塔山古墳	26	元能社牛池川遺跡	48	中尾遺跡
11	蛇穴山古墳	27	上野阿蘭禪寺・尼寺中間地域	49	正觀寺遺跡Ⅰ～Ⅳ
12	種荷山古墳	28	元能社西川遺跡	50	日高遺跡
13	元能社蒼海遺跡群 元能社小見遺跡・Ⅱ～VI遺跡 元能社小見内遺跡・Ⅱ～X遺跡 元能社草作遺跡・V遺跡 能社甲舎荷塚大道西遺跡・Ⅱ～IV遺跡 能社開泉明神北遺跡・Ⅱ～V遺跡 元能社宅地遺跡	29	上野国分寺参道遺跡	51	日高遺跡
14	北原遺跡	30	塙田村東遺跡	52	勝呂遺跡
15	国分境遺跡・Ⅱ・Ⅲ遺跡	31	鳥羽遺跡	53	新保田中村前遺跡
16	村東遺跡	32	弥勒遺跡・Ⅱ遺跡	54	元能社福樂遺跡
		33	元能社平乙道遺跡	55	箱田川西遺跡
		34	天神遺跡・Ⅱ遺跡	56	村前遺跡
		35	天神Ⅲ遺跡	57	五反田遺跡
		36	開泉橋遺跡	58	五反田Ⅱ遺跡
		37	開泉橋南遺跡	59	元能社弥勒遺跡
		38	犀教遺跡・Ⅱ遺跡	60	西部第一落合遺跡群（1）

度から平成 28 年度にかけて行われた第 2 期発掘調査成果から、これまで金堂と想定されていた建物跡が講堂であったことが判明し、それを受けて伽藍配置の変更が行われた。国分尼寺は昭和 44・45 年のトレンチ調査により伽藍配置が推定され、その後平成 12 年度に前橋市埋蔵文化財発掘調査團により南辺での寺域確認調査が行われた。調査の結果、南東・南西隅の築垣と、それに平行する溝跡や道路状遺構等が確認されている。また、高崎市教育委員会による平成 28 年度の調査で講堂跡が尼坊跡であったことが判明し、平成 29 年度の調査では回廊跡の一部が確認されている。関連遺跡としては鳥羽遺跡 [31] で神社遺構と工房跡が確認され、上野国分僧寺・尼寺中間地域では大規模な集落・掘立柱建物跡群が検出されている。

本遺跡周辺では高崎市浜川町周辺から N - 64° E 方向へ東山道（国府ルート）が延びると推定されている。前橋市域では平成 28 年度上野国府等範囲内容確認調査 45 a・b トレンチにおいて 2 時期の両側開溝を持つ道路跡を確認している。鳥羽遺跡でも 2 条の道路跡が確認されている。日高遺跡では幅約 45m の推定日高道が国府方向へ延びると推定されている。西部第一落合遺跡群（1）では推定東山道の駅場と考えられていた低地部から上幅 18 m、深さ 18 ~ 24 m の大型の溝が確認された。溝底面の出土遺物や覆土中に As-B が確認できることから古代の溝と想定されている。

当該期の一般的な集落は、牛池川と染谷川に挟まれた台地上に立地するが、国府推定域の中心部での分布は少なく、国府域と居住域の区分けが看取できる。近年の調査では元能社蒼海遺跡群（75 街区）No. 2 [13] で鑄造遺構を伴う工房跡が検出され、小金銅仏・三鉢杵・銅印の鋳型と鑄造に使用した須恵器転用取瓶・壇場が出土している。元能社蒼海遺跡群（145）[13] ではビットから 11 世紀前半と考えられるかわらけ状の壺と共に小金銅仏（觀音菩薩立像）が出土している。元能社蒼海遺跡群（141）[13] では推定上野国府城を南北に縱断する道路状遺構の一部が検出されている。

（5）中世 室町時代になると上野国守護上杉氏から守護代に任命された長尾氏が蒼海域を本拠地としこの地を治めた。大規模な城郭としては県内最古級といわれている蒼海域は上野国府の地割りを利用して城が造られたと云われているが、それを明確に示す文献・考古史料は見つかっていない。築城年代は定かではないが、『上毛伝説雜記拾遺』「總社記」に「長元元年戊辰（1028）六月、上總介平忠常下總國より引移らる、其の嫡子下總介常



Fig. 3 グリッド設定図

Tab. 2 西部第一落合遺跡群周辺遺跡一覧表

遺跡名	調査年度	時代・主な遺構・遺物
天神遺跡	1986	奈良・平安：住居跡、井戸、土坑 ◇白磁・青磁・灰釉陶器
天神Ⅱ遺跡	1989	奈良・平安：住居跡、井戸、土坑 ◇土師器・須恵器・石器
元経社寺田遺跡Ⅲ	1996	織文：土坑・墓生：住居跡、水田、島 奈良・平安：住居跡、井戸、土坑、溝、河道跡 中世：普海城外堀、井戸 近世：近代：土戸、井戸、島 ◇船形木製品・墨書き土器（圓面・圓底・圓腹・圓底）・人形・形代（馬形・刀形・琴柱形）・蓋車・横樋・塗器・軟質陶器・青磁・石塔・人骨・獸骨
天神Ⅲ遺跡	2008	奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡、道路状遺構 中世以降：溝・溝 ◇八棱鏡・綠釉陶器・大型円面鏡・須恵器・香炉
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ23	2013	平安：住居跡・溝・土坑、ピット ◇黒色土器高台壇、灰釉陶器。軟質土器
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ24	2013	中世：溝・土坑 近世以降：溝（芦田堰の一部） ◇土師器・須恵器・軟質陶器・常滑焼・獸骨
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ25	2013	平安：溝 中世：土坑、ピット、落ち込み ◇黒青土器（木・本）、刻畫土器（五芒星）、灰釉陶器・獸骨
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ26	2013	平安：住居跡、溝 中世：道路状遺構 ◇埴文坏・灰釉陶器・塗付土器・羽口
元経社落合遺跡	2014	奈良・平安：住居跡、土坑 ◇绳文土器（腹之内式）、土師器・須恵器
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ46	2016	古墳：住居跡（4世紀代） 奈良・平安：住居跡、溝・土坑、ピット 中世：溝・土坑、ピット群（掘立柱建物跡） ◇台付愛・灰釉陶器・綠釉陶器・古鉢（深平永宝カ）
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ52	2018	中世：溝、ピット 時期不明：道路状遺構 ◇灰釉陶器・黑色土器・青磁・茶臼
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ53	2018	近世：染谷川用道路カ
西部第一落合遺跡群（1）	2020	古墳：高跡 平安：整穴建物跡、溝・井戸・土坑 中世：普海城外堀 ◇丸（刻畫「大田」）灰釉陶器・綠釉陶器・鐵製品・銅製品（刀柄頭カ）・陶器器・石塔・石瓶
西部第一落合遺跡群（2）	2021	古墳：高跡 飛鳥～平安：整穴建物跡、土坑 中世：井戸・土坑、ピット ◇綠釉陶器・灰釉陶器

重、其の長子千葉介常胤、此の時城鎮護の為に、五智の如来を城の四方に數箇寺を建立有って安置す」とあり、城（館か）としての存在が窺える。また『吾妻鏡』に「治承四年子年（1180）九月晦日巳卯（中略）足利太郎俊綱、平家方人の為、同國府中の民居を焼き払う、是源家に属す輩の居住故也」とある。これは元経社地域を支配していた千葉常胤（源氏方）に対して足利俊綱（平氏方）が府中（国府周辺）を焼き払ったとの記載であり、国府あるいは国府周辺に千葉氏の居館が存在したことが証明できる史料である。こういった居館が初期蒼海城の姿であったと考えられる。

蒼海城は長尾・武田・上杉・織田・北条の支配を繰り返し、天正十八年（1590）の小田原落城により徳川家康の支配域となる。蒼海城には同年に諏訪頼忠、慶長六年（1601）には諏訪頼水（頼忠の子）に替わって秋元長朝が入部する。当時の城内には『上毛伝説雜記』に「戦後荒廃に帰し、普請成り兼ねたるにより城地艮（東北）に長屋を建てて居住した」と記されている。諏訪氏在城時は戦乱に明け暮れた城に対して一時凌ぎの修築に留めたと考えられる。秋元長朝は荒廃した城を大改築するよりも父景朝のゆかりの地である横野勝山（現在の総社町付近）に新城（総社城）を築くことを選んだようである。総社城築城までの間は蒼海城の東側に位置する八日市城に居住、慶長十五年（1610）に完成し入城、蒼海城は廢城となつた。

近年、元経社蒼海遺跡群では蒼海城に関連する遺構が多く確認されている。二の丸と想定されている元経社蒼海遺跡群（21）・（23）では新旧2時期の堀跡が検出されている。その堀跡からは12～15世紀の青白磁梅瓶、青磁酒会壺蓋・袴腰香炉などの貿易陶磁が多数出土している。元経社蒼海遺跡群（126）では本丸の土星および堀跡が確認されている。西部第一落合遺跡群（1）では「蒼海城絵図」（元経社公民館複製展示）に描かかれている南側の外堀と考えられる堀跡が検出されている。元経社蒼海遺跡群（145）でも蒼海城に関連する堀跡が確認されている。

III 調査方針と経過

委託調査箇所は前橋都市計画事業西部第一落合地区画整理事業地内であり、調査面積は115m²である。グリッド座標については近隣調査との整合性や以後の拡張性を考慮して元総社古海遺跡群の調査で使用されている任意グリッド座標（国家座標（日本測地系第IX系）X = 440000.000、Y = - 72200.000を基点とする4mピッチのもの）を使用した。なお経線をX、緯線をYとして北西隅を基点に番付して呼称とした。公共座標は次のとおりである。

測点	日本測地系（第IX系）	世界測地系（第IX系 測地成果2011）
X 281、Y 412	X = 42352000 m、Y = - 71076000 m	X = 42706.928 m、Y = - 71367.778 m

発掘調査は遺構確認面まで重機（0.25m³バックホー）にて表土掘削を行ない、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、測量・写真撮影の手順で実施した。遺構調査については土層の堆積状況を確認するため、土層ベルトを適宜設定した。なお、出土遺物に関しては、床面直上や遺構に伴うと判断したものはNo遺物とし、他の覆土中の破片等については一括遺物として取り上げた。遺構の記録には、図面作成はトータルステーション・電子平板を用いての測量・編集を行なった。記録写真は35mm判モノクロ・リバーサルフィルムと、デジタルカメラの3種類を用いて撮影を行った。調査区全景撮影についてはドローンを使用した。

調査経過については以下の通りである。7月5日より表土掘削開始。As-B混土層下面でピット・土坑のプランが検出されたため、この面を遺構確認面とした。但し、古代の遺構に関してはこの面では遺構プランが不明確であるため、適宜トレーナーを設定して掘削、堅穴建物跡の床面・壁の立ち上がりや遺構プランの確認を行った。各遺構の調査は7月20日までに終了、21日にドローンによる空中写真撮影を行った。同日、前橋市教育委員会事務局文化財保護課の立会いのもと発掘作業終了確認が行われた。27・28日に埋め戻し作業を行い現地での作業を終了した。

IV 基本土層

基本土層は調査区北西壁（A地点）とI～2の壁面（B地点）において観察を行った（Fig. 4）。

I層土は現代の表土層、II層土は暗褐色のAs-B混土層である。III・IV層土は暗褐色土に焼土粒・炭化物を主に含み、土器片も少量混入する包含層である。III層上面において中世の遺構を確認している。調査区北西側においてはAs-Cを含む黒色土、いわゆる「C黒」と呼称される土層（V層）が確認できる。また「C黒」上面には部分的にHr-FAを含む洪水平積層が見られる。VI～VII層は非常に粘性の高い粘質土層である。IX層の総社砂層は榛名山系の山体崩落に起因する陣場岩屑なだれ（約1.7万年前）以降に堆積した河川性堆積物（相馬ヶ原層状地堆積物上部）と考えられている。

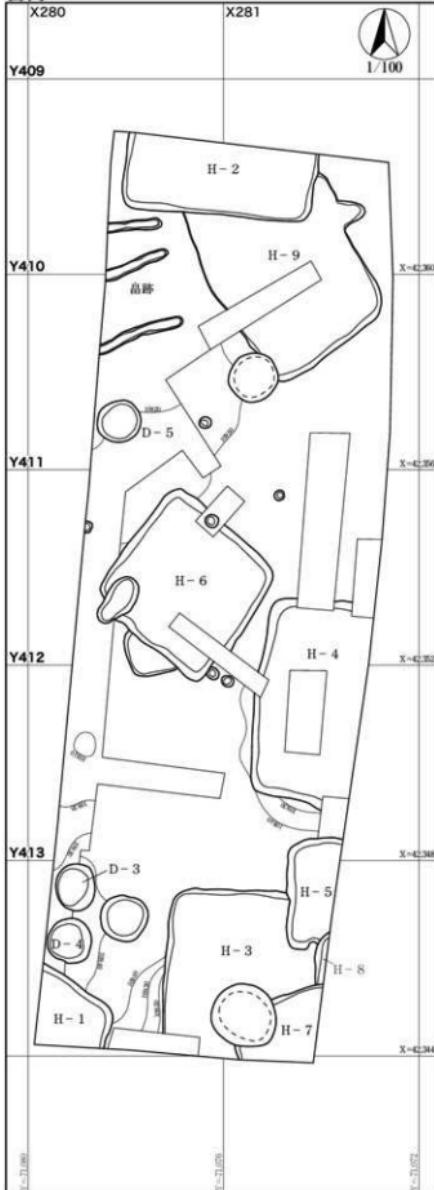
註

（1）早田 雄 2018 「付録 自然科学分析」
『小八木発掘研究道路』 高崎市教育委員会



Fig. 4 基本土層

古代



中世

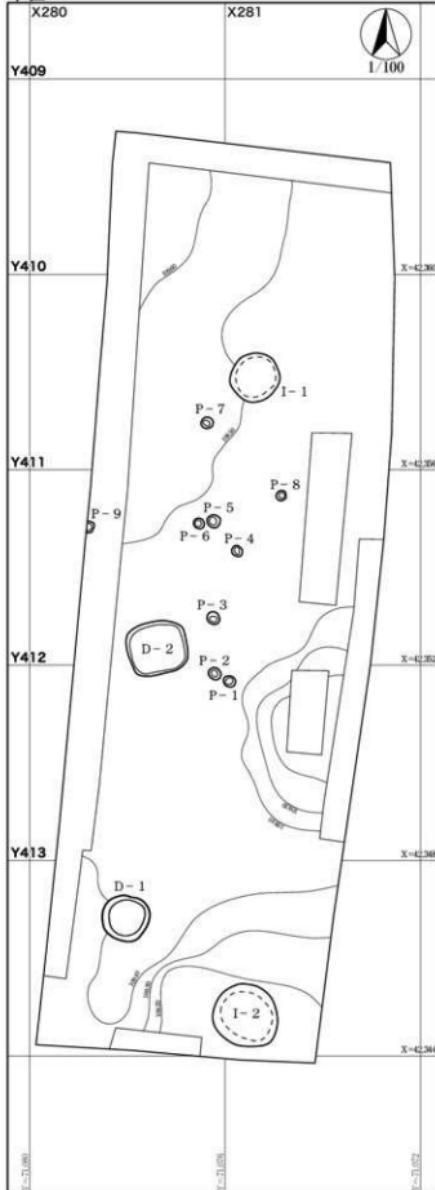


Fig. 5 調査区全体図

V 遺構と遺物

1 積穴建物跡

H-1号積穴建物跡 (Fig. 6・9, Tab. 3, PL. 1・3)

位置 X280、Y413 主軸方向 N-54°-W 規模 大部分が調査区外。東西(1.83)m、南北(1.52)m、壁高0.09m。床面積(1.90)m² 床面 中央部に硬化面が広がる。カマド 確認できず。床面や調査区壁の焼土分布状況から東壁側(調査区外)に設置されていると推測される。出土遺物 所謂「かわらけ」と呼称される須恵器小皿(1)を図示。その他に土師器・須恵器の壺・甕や灰釉陶器塊の小片等が出土している。時期 出土遺物の傾向から11世紀後半と想定される。

H-2号積穴建物跡 (Fig. 6・9, Tab. 3, PL. 1・3)

位置 X280・281、Y409 主軸方向 N-6°-E 規模 半分以上は調査区外。東西3.89m、南北(1.44)m、壁高0.51m。床面積(5.71)m² 床面 地山床 重複 H-9と重複関係にあり、本遺構はH-9より新しい。カマド 確認できず 出土遺物 須恵器盤(1)、土師器壺(2~4)を図示。その他に土師器・須恵器の壺・甕の小片が出土している。時期 重複関係と出土遺物の傾向から8世紀後半と想定される。

H-3号積穴建物跡 (Fig. 7・10, Tab. 3, PL. 1・3)

位置 X280・281、Y413 主軸方向 N-86°-W 規模 東西(3.10)m、南北(3.45)m、壁高0.30m。床面積(6.78)m² 床面 中央部から東壁方向にかけて硬化面が広がる。重複 H-5・7・8、I-2と重複関係にあり、本遺構は最も古い。カマド カマド本体の確認には至っていないが、東端の床面に火床が確認できることから東壁側にカマドがあったと推測される。カマド本体はH-8により削平されている。出土遺物 緑釉陶器後皿(1)、須恵器壺(2)を図示。その他に土師器・須恵器の壺・甕・土釜や灰釉陶器塊の小片が出土している。時期 重複関係と出土遺物の傾向から9世紀末から10世紀初頭と想定される。

H-4号積穴建物跡 (Fig. 7・10, Tab. 3, PL. 1・3)

位置 X281、Y411・412 主軸方向 N-5°-E 規模 東半分は調査区外。東西(2.21)m、南北4.09m、壁高0.30m。床面積(6.64)m² 床面 地山床 カマド 確認できず 出土遺物 須恵器塊(1)と須恵器小皿(かわらけ、2・3)を図示。その他に土師器・須恵器の壺・甕、土釜や灰釉陶器塊の小片が出土している。時期 出土遺物の傾向から11世紀と想定される。

H-5号積穴建物跡 (Fig. 7, PL. 1)

位置 X281、Y412・413 主軸方向 N-1°-E 規模 半分は調査区外。東西(1.00)m、南北(2.36)m、壁高0.36m。床面積(2.11)m² 床面 地山床 重複 H-3・8と重複関係にあり、本遺構は最も新しい。カマド 確認できず 出土遺物 土師器・須恵器の壺・甕・羽釜や灰釉陶器塊・瓶類の小片が出土している。時期 重複関係と出土遺物の傾向から10世紀後半頃と想定される。

H-6号積穴建物跡 (Fig. 7・8・10, Tab. 3, PL. 1~3)

位置 X280・281、Y411・412 主軸方向 N-38°-E 規模 東西2.94m、南北2.91m、壁高0.36m。床面積7.82m 床面 地山床 カマド 南西隅に位置。燃焼部は平面形状梢円形に窪む。出土遺物 須恵器塊(1)と羽釜(2)を図示。その他に土師器・須恵器の壺・甕や灰釉・緑釉陶器塊の小片が出土している。時期 出土遺物の傾向から10世紀後半と想定される。

H-7号積穴建物跡 (Fig. 7・8, PL. 1)

位置 X281、Y413・414 主軸方向 N-21°-W 規模 大部分が調査区外。東西(1.97)m、南北(1.50)m、壁高0.38m。床面積(1.56)m² 床面 地山床。中央部に向かってやや傾斜する。重複 H-3・8、I-2と重複関係にあり、本遺構はI-2より古く、H-3・8より新しい。カマド 確認できず 出土遺物 土

師器・須恵器の壺・甕や灰釉陶器瓶類・綠釉陶器壺の小片が出土している。 時期 重複関係と出土遺物の傾向から10世紀後半頃と想定される。 備考 床面において方形状の総社砂層切石が確認されている。

H-8号堅穴建物跡 (Fig. 7, PL. 1)

位置 X281、Y412-413 主軸方向 N-7°-E 規模 一部のみ確認。東西(0.25) m、南北(1.11) m、壁高0.31 m。床面積(0.20) m² 床面 地山床 重複 H-3・5・8と重複関係にあり、本遺構はH-5・7より古く、H-3より新しい。カマド 確認できず 出土遺物 土師器・須恵器の壺・甕や灰釉陶器壺の小片が出土している。 時期 重複関係や出土遺物の傾向から10世紀前半頃と想定される。

H-9号堅穴建物跡 (Fig. 6・10, Tab. 3, PL. 2・3)

位置 X280・281、Y409・410 主軸方向 N-59°-E 規模 東西3.19 m、南北(3.96) m、壁高0.27 m。床面積(8.49) m² 床面 地山床 重複 H-2、I-1と重複関係にあり、本遺構は最も古い。カマド 北東方向に位置し、周囲に焼土粒・炭化物が散っている。燃焼室は壁外へ0.52 m突出する。燃焼部幅0.50 m。燃焼部底面から煙道部へ向かって緩やかに上がる。出土遺物 須恵器壺(1)と土師器壺(1)を図示。その他に土師器・須恵器の壺・甕の小片が出土している。 時期 重複関係と出土遺物の傾向から7世紀後半から8世紀初頭と想定される。 備考 建物西側床面において角柱状の総社砂層切石2つ、扁平な川原石1つが確認されている。

2 井戸、墓跡、土坑、ピット (Fig. 5・6・8・10, Tab. 2・3, PL. 1~3)

計測値については「Tab. 2 井戸、土坑、ピット計測表」を参照のこと。井戸2基・ピット9基と土坑2基(D-1・2)については覆土中にAs-B混入土が確認できることから中世に帰属する遺構と想定される。その他の土坑(D-3~5)に関しては土層や出土遺物から古代の遺構と考えられる。墓跡は「C黒」(V層)が面として確認できる調査区北西側のみで検出。3条の歓間溝の覆土中にはブロック状のHr-FA洪水層土が確認できる。6世紀前半頃の墓跡と想定される。

Tab. 3 井戸・土坑・ピット計測表

井戸

遺構名	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	確認深度(m)	平面形状	出土遺物	備考
I-1	X281、Y410	1.00	0.98	0.99	円形	土師器、須恵器	断面弧状
I-2	X280・281、Y413	1.34	1.28	1.00	円形	土師器、須恵器	断面漏斗状

土坑

遺構名	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形状	出土遺物	備考
D-1	X280、Y413	0.96	0.91	0.23	円形	土師器、須恵器	断面弧状
D-2	X280、Y411・412	1.21	1.08	0.17	方形	土師器、須恵器、灰釉陶器	断面弧状
D-3	X280、Y413	0.96	0.81	0.25	楕円形	土師器、須恵器	断面弧状
D-4	X280、Y413	0.92	0.92	0.29	円形	土師器、須恵器、灰釉陶器	断面弧状
D-5	X280、Y410	0.88	0.90	0.12	円形	土師器、須恵器	断面弧状

ピット

遺構名	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形状	出土遺物	備考
P-1	X280・281、Y412	0.24	0.22	0.14	円形		断面U字状
P-2	X280、Y412	0.26	0.25	0.18	円形	土師器	断面U字状
P-3	X280、Y411	0.26	0.26	0.30	円形		断面U字状
P-4	X281、Y411	0.23	0.22	0.14	円形		断面U字状
P-5	X280、Y411	0.27	0.26	0.35	円形	土師器、須恵器	断面U字状
P-6	X280、Y411	0.22	0.21	0.14	円形		断面U字状
P-7	X280、Y410	0.25	0.23	0.22	円形	土師器	断面U字状
P-8	X281、Y411	0.21	0.20	0.15	円形		断面U字状
P-9	X280、Y411	0.23	(0.16)	0.22	円形		断面U字状

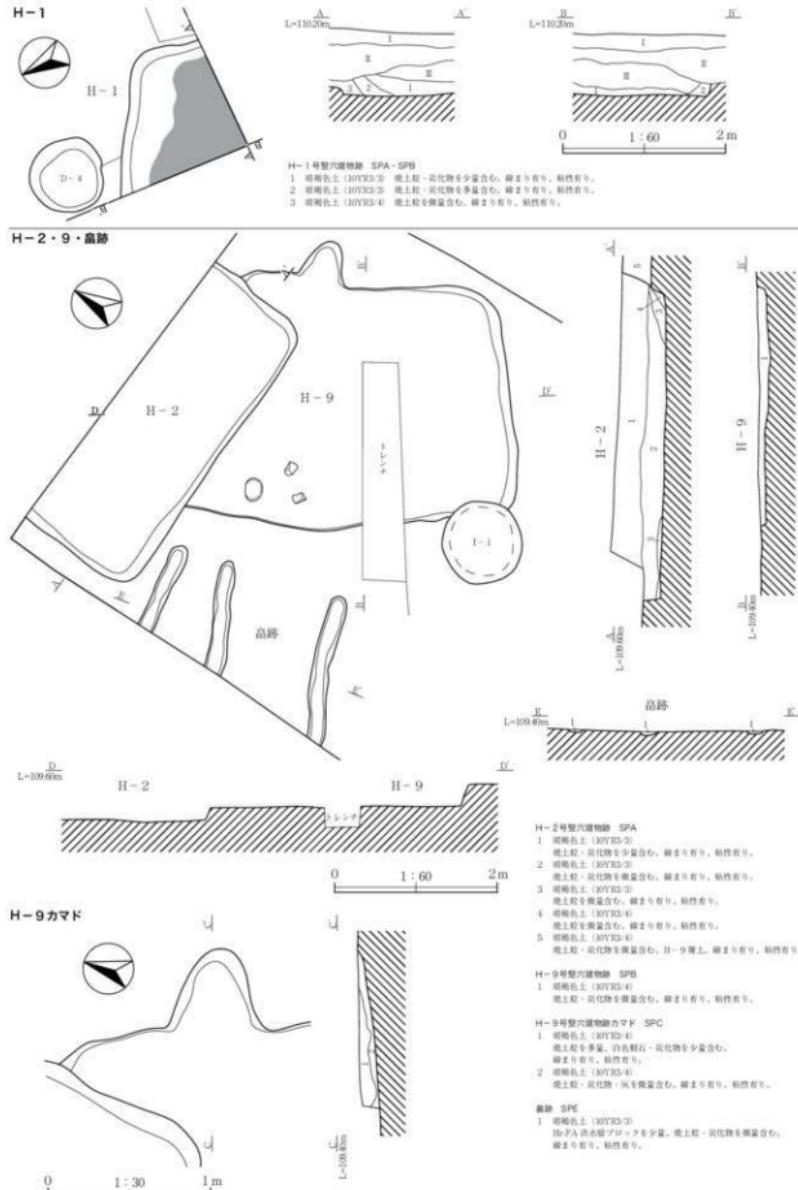


Fig. 6 H-1・2・9号堅穴建物跡、晶跡

H-3~8

H-3 号空穴建物跡 SPA

- 1 前側地土 (10YR3/3)
地土堅・炭化物を微量含む。緻まり有り。粘性有り。
- 2 前側地土 (10YR3/3)
地土堅・炭化物を微量含む。緻まり有り。粘性有り。

H-4・5・7・8号空穴建物跡 SPB

- 2' Aa3.5 地層
- 1 前側地土 (10YR3/2)
地土堅・炭化物を微量含む。H-8 壤土。
緻まり有り。粘性有り。
 - 2 前側地土 (10YR3/2)
地土堅・炭化物を微量含む。H-7 壤土。
緻まり有り。粘性有り。
 - 3 前側地土 (10YR3/3)
地土堅・炭化物を微量含む。H-5 壤土。
緻まり有り。粘性有り。
 - 4 前側地土 (10YR3/3)
地土堅・小量含む。H-7 壤土。緻まり有り。粘性有り。
 - 5 前側地土 (10YR3/3)
地土堅・炭化物を微量含む。H-7 壤土。
緻まり有り。粘性有り。
 - 6 前側地土 (10YR3/3)
地土堅・炭化物を微量含む。H-4 壤土。緻まり有り。粘性有り。

H-4・6号空穴建物跡 SPC

- 1 前側地土 (10YR3/3)
地土堅・炭化物を微量含む。H-6 壤土。
緻まり有り。粘性有り。
- 2 前側地土 (10YR3/3)
地土堅・多量。炭化物を小量含む。H-6 壤土。
緻まり有り。粘性有り。
- 3 前側地土 (10YR3/3)
地土堅・小量含む。H-6 壤土。緻まり有り。粘性有り。
- 4 前側地土 (10YR3/3)
前側地土 壤土上にロックを多量含む。H-6 壤土。
緻まり有り。粘性有り。
- 5 前側地土 (10YR3/3)
炭化物を多量含む。H-6 壤土。
緻まり有り。粘性有り。
- 6 前側地土 (10YR3/3)
地土堅・炭化物を小量含む。H-6 壤土。
緻まり有り。粘性有り。
- 7 前側地土 (10YR3/3)
地土堅・炭化物を微量含む。H-4 壤土。
緻まり有り。粘性有り。
- 8 前側地土 (10YR3/3)
地土堅・炭化物を微量含む。H-4 壤土。
緻まり有り。粘性有り。
- 9 前側地土 (10YR3/3)
地土堅・小量含む。H-4 壤土。
緻まり有り。粘性有り。

L=109.0m



Fig. 7 H-3 ~ 8号空穴建物跡

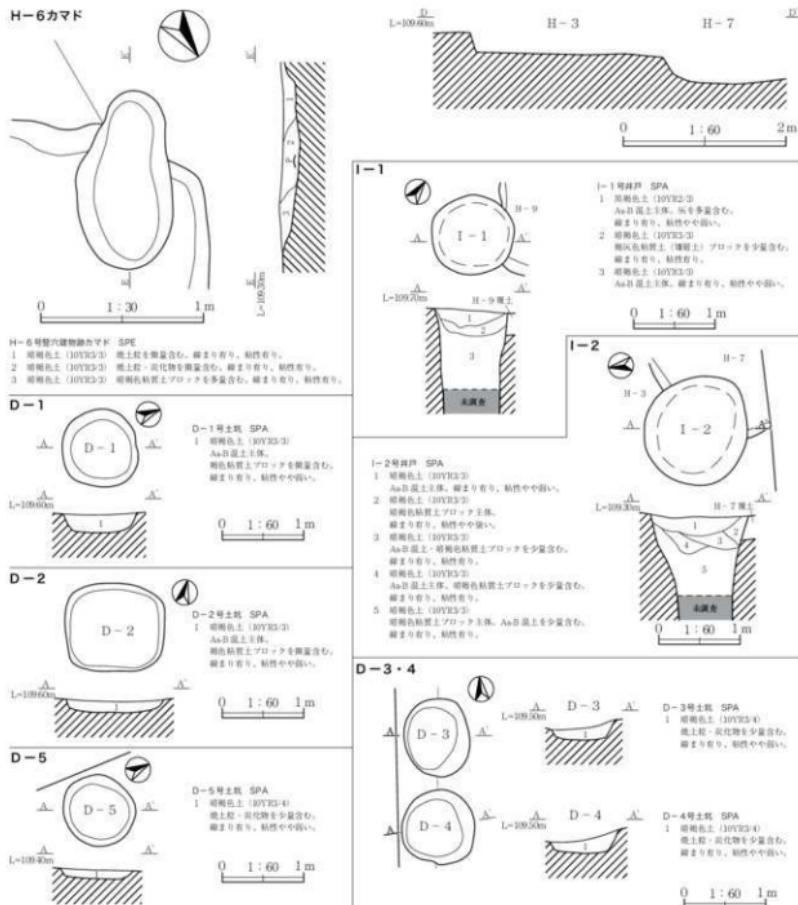


Fig. 8 H-6号堅穴建物跡カマド、井戸、土坑

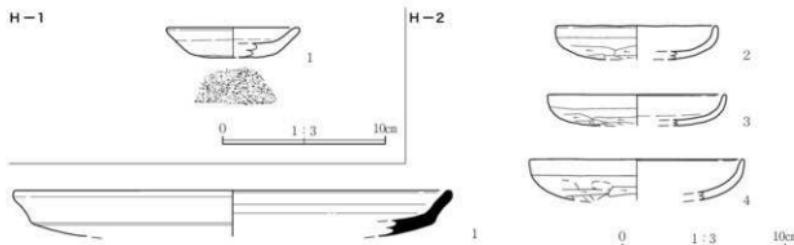


Fig. 9 出土遺物 (1)

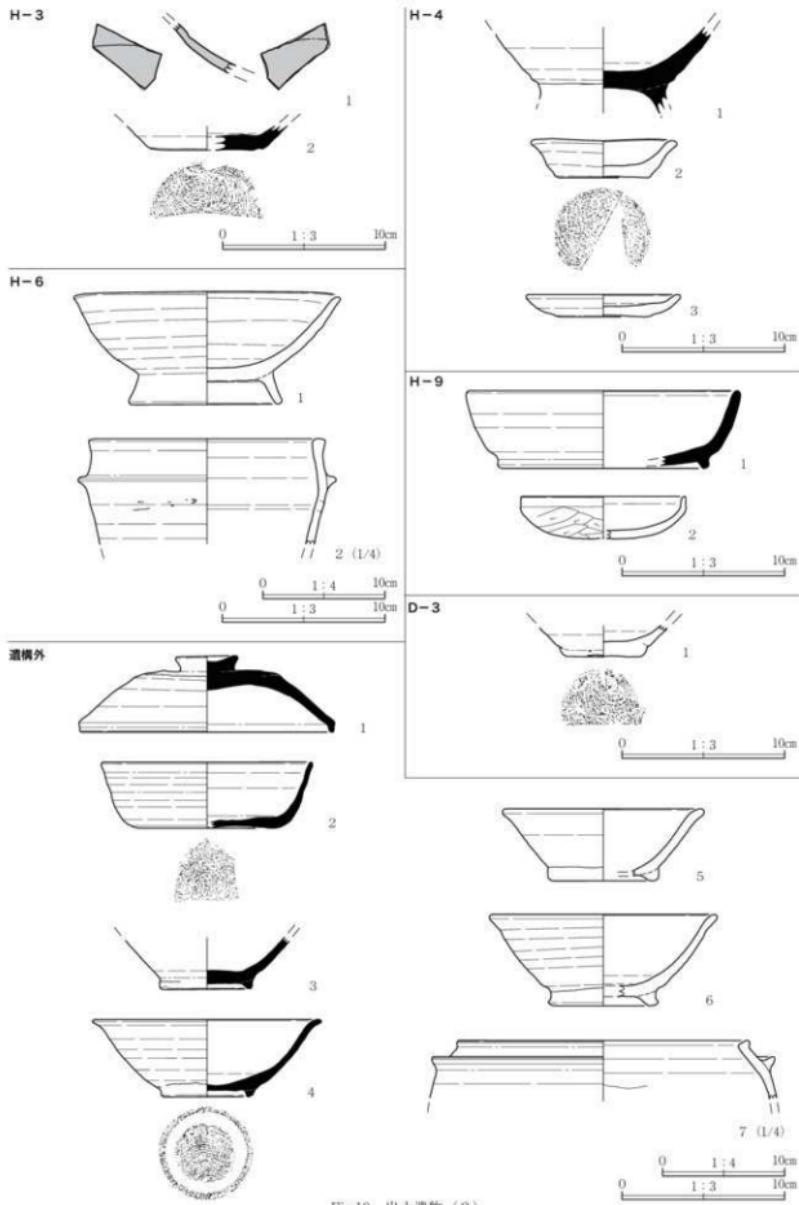


Fig.10 出土遺物 (2)

Tab. 4 出土遺物観察表

H-1

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	覆土	須恵器 小瓶	[8.2]	[5.4]	18.5	白・黒・茶色 鉢	無化粧	浅黄褐	外側ロクロナガ→底部凹面へラケツリ。 内側ロクロナガ。	1/2残存。かわらけ。

H-2

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	覆土	須恵器 瓶	[27.0]	—	[36]	白・黒色鉢	堅焼	黒灰	外側ロクロナガ→底部凹面へラケツリ。 内側ロクロナガ。	破片。口縁一部。
2	覆土	土師器 坯	[10.0]	丸底	[20]	白・黒色鉢、 黒色母	良好	黒	外側ロクロナガ。底凹面へラケツリ。 内側ロクロナガ。	破片。
3	覆土	土師器 坯	[11.0]	丸底	[18]	白・黒色鉢、 黒色母	良好	黒	外側ロクロナガ。底凹面へラケツリ。 内側ロクロナガ。底凹面へラケツリ。	破片。
4	覆土	土師器 坯	[13.0]	丸底	[25]	白・黒色鉢、 黒色母	良好	黒	外側ロクロナガ。底凹面へラケツリ。 内側ロクロナガ。	破片。

H-3

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	覆土	縫合器 鉢	—	—	[20]	粘土質	堅焼	オリーブ 青	外側ロクロナガ。縫合施點。明確な段面を有する。 内側ロクロナガ。縫合施點。明確な段面を有する。	破片。全体半分。
2	覆土	須恵器 瓶	—	[6.0]	[15]	白・黒色鉢	堅焼	黒灰	外側ロクロナガ。底部凹面へラケツリ。 内側ロクロナガ。	破片。全体下部一部。

H-4

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	床面	須恵器 瓶	—	—	[5.2]	白・黒色鉢	堅焼	黒褐	外側ロクロナガ。底部凹面へラケツリ。高台貼付け。	1/3残存。全体一部。
2	覆土	須恵器 小瓶	[8.0]	[5.8]	24	白・黒・茶色 鉢	無化粧	浅黄褐	外側ロクロナガ。底部凹面へラケツリ。 内側ロクロナガ。	2/3残存。かわらけ。
3	覆土	須恵器 小瓶	[8.0]	[5.8]	13	白・黒・茶色 鉢	無化粧	黒	外側ロクロナガ。底部凹面へラケツリ。 内側ロクロナガ。	破片。かわらけ。

H-5

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	覆土	須恵器 瓶	—	—	[5.2]	白・黒色鉢	堅焼	黒褐	外側ロクロナガ。底部凹面へラケツリ。高台貼付け。	1/3残存。全体一部。
2	覆土	須恵器 小瓶	[10.0]	[5.8]	24	白・黒・茶色 鉢	無化粧	浅黄褐	外側ロクロナガ。底部凹面へラケツリ。 内側ロクロナガ。	2/3残存。かわらけ。

H-6

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	覆土	須恵器 瓶	—	—	[5.2]	白・黒色鉢	堅焼	黒褐	外側ロクロナガ。底部凹面へラケツリ。高台貼付け。	1/3残存。全体一部。
2	覆土	須恵器 小瓶	[10.0]	[5.8]	24	白・黒・茶色 鉢	無化粧	浅黄褐	外側ロクロナガ。底部凹面へラケツリ。 内側ロクロナガ。	2/3残存。かわらけ。

H-7

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	覆土	須恵器 瓶	[16.8]	[13.0]	44	白・黒色鉢	堅焼	黒灰	外側ロクロナガ。高台貼付け。底凹面へラケツリ。	1/4残存。
2	覆土	土師器 坩	[10.0]	丸底	26	白・黒色鉢、 黒色母	無化粧	暗褐	外側ロクロナガ。底凹面へラケツリ。 内側ロクロナガ。	破片。

H-8

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	覆土	須恵器 瓶	[16.0]	—	46	白・黒色鉢	堅焼	墨褐	外側ロクロナガ。輪筋貼付け後、周囲をヘラ調整。 内側ロクロナガ。	2/3残存。

H-9

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	覆土	須恵器 瓶	[16.0]	—	46	白・黒色鉢	堅焼	墨褐	外側ロクロナガ。輪筋貼付け後、周囲をヘラ調整。 内側ロクロナガ。	2/3残存。

D-3

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	覆土	須恵器 小瓶	—	[4.0]	[2.0]	白・黒・茶色 鉢	無化粧	浅黄褐	外側ロクロナガ。底部凹面へラケツリ。	1/2残存。かわらけ。

遺構外

No	出土位置	種別、器種	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	胎土	焼成	色調	形状、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	縫合器	須恵器 瓶	[16.0]	—	46	白・黒色鉢	堅焼	墨褐	外側ロクロナガ。輪筋貼付け後、周囲をヘラ調整。 内側ロクロナガ。	2/3残存。
2	縫合器	須恵器 瓶	[12.7]	[7.0]	43	白・黒色鉢	堅焼	灰白	外側ロクロナガ。底部凹面へラケツリ。	1/5残存。
3	縫合器	須恵器 瓶	[14.1]	—	48	白・黒色鉢	堅焼	黒灰	外側ロクロナガ。底部凹面へラケツリ。	1/4残存。
4	縫合器	須恵器 瓶	—	55	[3.2]	白色鉢	堅焼	墨褐	外側ロクロナガ。底部凹面へラケツリ。	1/4残存。
5	縫合器	須恵器 瓶	[12.4]	[7.2]	49	白・黒色鉢	無化粧	灰白	外側ロクロナガ。底部凹面へラケツリ。	1/5残存。
6	縫合器	須恵器 瓶	[14.0]	[7.4]	55	白・黒色鉢	無化粧	灰白	外側ロクロナガ。底部凹面へラケツリ。	1/4残存。
7	縫合器	須恵器 瓶	[24.0]	—	[5.0]	白・黒色鉢	無化粧	黒灰	外側ロクロナガ。	破片。

VI まとめ

今回の調査で堅穴建物跡9軒、井戸2基、土坑5基、ビット9基、畠跡1面を検出した。ここでは西部第一落合遺跡群（2）（以下「落合2」）と本遺跡に隣接する西部第一落合遺跡群（1）（同「落合1」）の調査成果を基に、既往の調査事例と合わせて本地域の土地利用の変遷について概観し、考察を加えたいと思う。

中村岳彦氏は元総社蒼海遺跡群の調査成果を基に推定上野国府周辺の古代景観について検討を行っている（中村2018）。発掘調査で確認された古墳時代後期の堅穴建物跡の分布を地図に落とし込むと牛池川两岸の微高地および染谷川左岸の自然堤防上に集落が集中し、周辺の後背低地や台地上には水田や畠などの生産域を備えていたと指摘している。

染谷川・牛池川に挟まれた落合地区では発掘調査の事例が少ないと影響して古墳時代の集落跡は極めて少ない。検出事例として2遺跡あり、本遺跡から北西方向に位置する上野国府等範囲内容確認調査46トレントにおいて4世紀代の堅穴建物跡が1軒、本遺跡から北東方向の牛池川河川改修工事に伴って調査が行われた元総社寺田遺跡Ⅲで4世紀代3軒、As-Cに直接埋没した水田・畠が確認されている。落合1・2でも集落は確認されておらず、出土遺物を見ても該期の遺物は少ない。集落の痕跡は確認されてはいないが、落合1調査区北側や落合2調査区北西隅部などの「C黒」層が確認できる場所では畠跡が検出されている。覆土中にHr-FA洪水層を含んでいたため古墳時代後期の畠跡と想定される。また落合1・2調査区南側や本遺跡南西100mに位置する元総社落合遺跡では「C黒」層は確認されていない。削平の影響と考えられるが「C黒」層がある場所と同様に畠跡が広がっていた可能性が高い。以上のことから古墳時代後期には落合1・2周辺は生産域として使用されていたと考えられ、集落は元総社地域から続く牛池川左岸や染谷川右岸沿いの自然堤防上に分布するのではないかと推測される。

古墳時代以降、それまで生産域として利用されていた落合地区でも集落が営まれるようになる。落合2では7世紀から11世紀の堅穴建物跡が9軒、落合1では9世紀から11世紀にかけての堅穴建物跡が36軒、元総社落合遺跡では8世紀代6軒、9世紀代3軒の堅穴建物跡が確認されている。3遺跡の成果をまとめるとき8世紀頃までの集落は少なく散在しているが、9世紀以降は徐々に増加し地域内に広く展開していく。この様相は11世紀頃まで続くと考えられる。

落合1W-1は古代から存在していた大形の溝である。底面出土の遺物や覆土中位にAs-Bが確認できることから10世紀頃までは底面近くまで流水していたと推測される。落合1ではこの溝から分岐する溝（8～9世紀代）が3条確認されている。落合1W-1から取水し、その溝を伝って周辺集落や畠等の耕作地へ給水していたと考えられる。溝から集落域北端まで約30mの距離がある。この間には東山道国府ルートが通るとして推定されているが、その痕跡は未だ確認されていない。

中世の集落域を把握することは難しいが、落合1・2では井戸・土坑・ビット、上野国府等範囲内容確認調査46トレントでは掘立柱建物跡と想定されるビット群が確認されており、集落の存在を垣間見えることができる。室町時代中期の押僧万里集九の詩文集『梅花無尽巻』の長享二年（1488）九月二十九日の条をみると「僧万里、馬上より上野総社を望拝してみると、数年前の戦乱で数株の老樹に斧の傷跡を残すが、村落は平和に回復している様子が窺える。」と記されている。戦乱の渦中にあった元総社地域周辺にも村落が営まれていたことがわかる。

往時の蒼海城の姿を描かれた「蒼海城絵図」（複製前橋市総社資料館蔵）によれば落合1・2周辺は城外に位置し、落合1W-1は蒼海城南側の外堀にあたる。なお本遺跡北約200mに位置する釈迦尊寺は寺伝によれば、持統天皇元年（687）創建とされる歴史のある寺である。永禄六年（1563）甲州勢の兵火により寺は

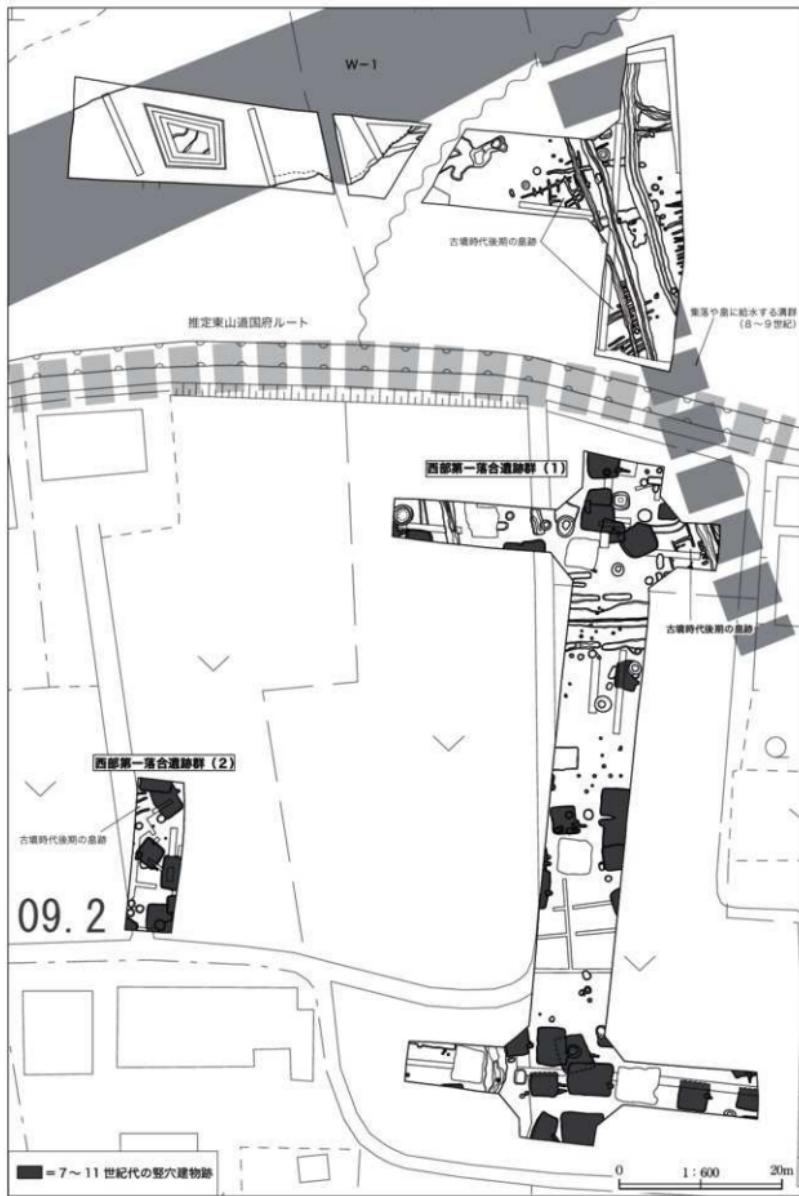


Fig.11 西部第一落合遺跡群（1）・（2）周辺の景観想定図

焼かれ、末寺であった竜松寺（現在の釈迦尊寺の場所）に移ったという。「蒼海城跡図」や總社神社に設置されている「蒼海城跡地図」を見ると現在の釈迦尊寺の位置に「龍松寺」と記載されており、そこから南東方向へ牛池川を越えた場所に移転前の釈迦尊寺が確認できる。

以上の考察を基に本遺跡周辺の景観想定図を作成してみた（Fig. 11）。古墳時代においては畠等の生産域として使用され、集落は少し離れた牛池川・染谷川沿いの自然堤防上に営まれたと考えられる。7世紀以降、落合1・2の集落は北を大溝（W-1）と推定東山道駿路に、東西を牛池川と染谷川によって規制され、この台地上に集落域を広げていった考えられる。中世段階においては造橋も少なく判然としないが、少なくとも集落が存在していた可能性は高い。

本遺跡周辺の景観想定をしてみたものの調査成果の蓄積が少ないため未だ不明確な点が多い。同じ都市計画事業に伴う発掘調査である元總社蒼海遺跡群は調査開始から約20年以上が経過している。その間に蓄積した膨大な調査成果から推定国府周辺の様相や蒼海城の縄張りが少しづつ解明されてきている。落合地区での発掘調査はまだスタートしたばかりである。今後、西部第一落合遺跡群の調査成果の増加によって落合地区の土地利用の様相が解明されることを期待したい。

註

（1）ここでは便宜上、西部第一落合土地区画整理事業地内を落合地区と呼ぶ。

引用・参考文献

論文等

中村哲彦 2018 「『推定上野国府』周辺の古代景観－元總社蒼海遺跡群の溝と道－」『群馬文化』第332号 群馬県地域文化研究協議会

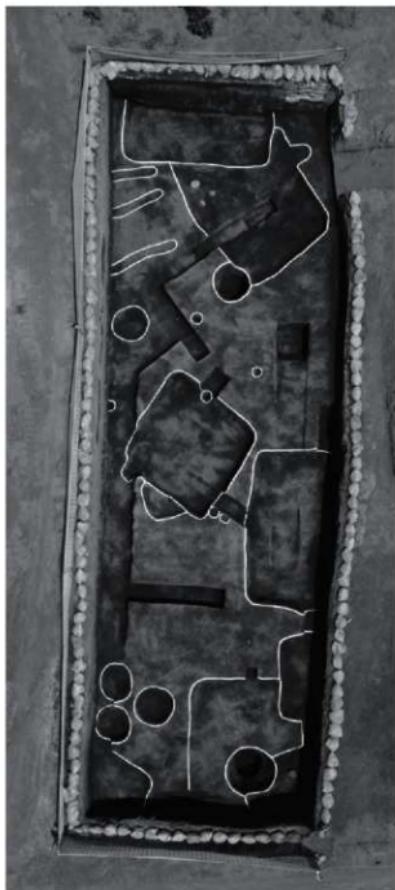
市町村史

国府村誌編纂委員会 1968 『国府村誌』

報告書

- （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988 『鳥羽遺跡 I・J・K区』
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996 『元總社寺田遺跡III』
前橋市教育委員会 1987 『天神道路』
前橋市教育委員会 1989 『天神丘道路』
前橋市教育委員会 2008 『天神丘道路』
前橋市教育委員会 2010 『元總社蒼海遺跡群（31）』
前橋市教育委員会 2014 『元總社落合遺跡』
前橋市教育委員会 2015 『推定上野国府～平成25年度調査報告～』上野国府等範囲内容確認調査報告書III
前橋市教育委員会 2018 『推定上野国府～平成28年度調査報告～』上野国府等範囲内容確認調査報告書VI
前橋市教育委員会 2019 『推定上野国府～平成29年度調査報告～』上野国府等範囲内容確認調査報告書VII
前橋市教育委員会 2020 『西部第一落合遺跡群（1）』

写真図版



調査区全景（上が北）



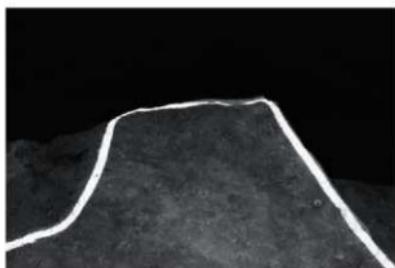
H-1 全景（北東から）



H-2 全景（南東から）



H-3 全景（西から）



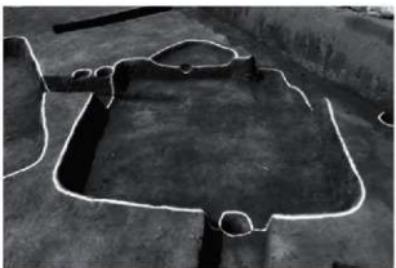
H-3 火床面全景（西から）



H-4 全景（西から）



H-3・5・7・8全景（南から）



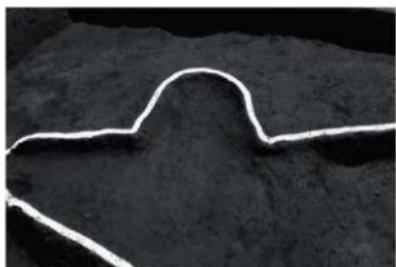
H-6全景（北から）



H-6カマド全景（北から）



H-9全景（西から）



H-9カマド全景（西から）



H-9石出土状況（南から）



I-1全景（東から）



I-2全景（南から）



Iwazu 全景（南から）



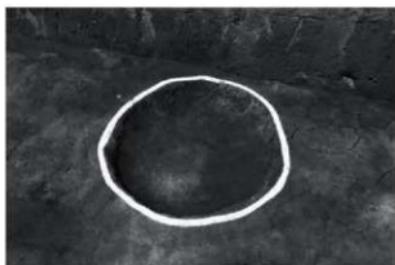
D - 1 全景（東から）



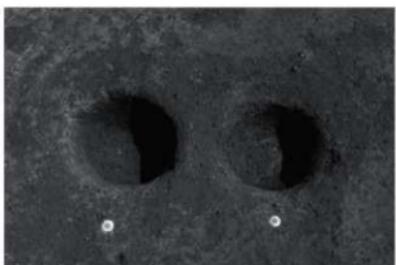
D - 2 全景（南から）



D - 1・3・4 全景（東から）



D - 5 全景（東から）



P - 1・2 全景（南から）



P - 3 全景（南から）



P - 4～6 全景（南から）



P - 7 全景（南から）



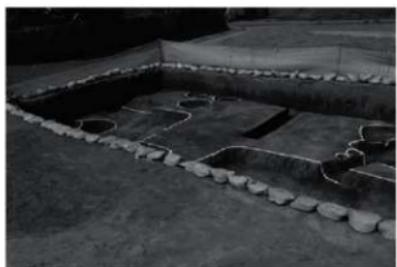
P - 8 全景（南から）



P - 9 全景（東から）



調査区北側基本土層（東から）



調査区南側全景（東から）



調査区北側全景（東から）



調査風景（北西から）



調査風景（南から）



H - 1 - 1



H - 2 - 1



H - 2 - 2



H - 2 - 3



H - 2 - 4



H - 3 - 1



H - 3 - 2



H - 4 - 1



H - 4 - 2



H - 4 - 3



H - 6 - 1



H - 6 - 2 (1/4)



H - 9 - 1



H - 9 - 2



D - 3 - 1



遺構外 - 1



遺構外 - 2



遺構外 - 3



遺構外 - 4



遺構外 - 5



遺構外 - 6



遺構外 - 7 (1/4)

報告書抄録

ふりかな 書名	せいぶだいいちおちあいいせきぐん（2） 西部第一落合遺跡群（2）
副書名	前橋都市計画事業西部第一落合地区面整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	佐野良平
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町 1-15-3
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市總社町 3 丁目11番4
発行年月日	2021年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	位 置 道路番号	北 緯	東 經	調査期間	調査 面積	調査原因
西部第一落合遺跡群（2）	群馬県前橋市總社町 749	102016	3 A267	36°22'56"	139°02'16"	20210705 ～ 20210728	115m ²	前橋都市計画事業 西部第一落合 地区面整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西部第一落合遺跡群（2）	生産	古墳時代	晶蹄	1面	・鉢開溝の覆土中にHr-FA洪水層土ブロッケが含まれる。
	集落	飛鳥時代 奈良時代 平安時代	堅穴建物跡 土坑	9軒 3基	・土師器 須恵器 灰釉陶器 縁柱陶器
		中世	井戸 土坑 ピット	2基 2基 9基	・7世紀後半～11世紀後半の集落跡

西部第一落合遺跡群（2）

前橋都市計画事業西部第一落合地区面整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2021年9月15日 印刷

2021年9月30日 発行

発行

前橋市教育委員会事務局文化財保護課

〒371-0853 群馬県前橋市總社町 3 丁目11番4

TEL 027-280-6511

技研コンサル株式会社

朝日印刷工業株式会社

印刷

